

分析報告書

2025 年度-2026 年度春学期授業評価アンケート分析 -自由記述内容の比較を中心に-

要旨

2025 年度と 2026 年度の春学期授業評価アンケートの自由記述を対象に、さまざまな視点からキーワード分析と統計的検定を実施した。記述件数は前年度より減少したが、評価の極性構成比に統計的有意差は見られなかった。一方、教員の種別分析では特定の極性の出現が有意に高いこと、そして授業別では、前年度と比べて今年度に特定の極性の出現に変化が見られたことを明らかにした。

はじめに

本報告書は、2025 年度春学期と 2026 年度春学期の授業評価アンケート自由記述（質問項目 18 番）を対象に、キーワード分析、極性分析、統計的検定を通じて授業改善に資する知見を整理したものである。第 1 部ではアンケートの調査概要、各種データの集計結果を示す。第 2 部では自由記述のキーワード分析、極性分析、教員の種別および建物・教室別の傾向を示す。第 3 部では授業別のネットスコアを算出・年度間の比較を行い、最後に第 4 部にてまとめを述べる。

1 授業評価アンケートの概要

1.1 2026 年度春学期の調査概要

2026 年度春学期の授業評価アンケートは、2025 年度の実施日程と同じスケジュールで実施された。春学期第 5 週目から第 7 週目（2026 年 5 月 6 日（水）から 5 月 26 日（火））に周知・呼びかけを行い、5 月下旬に FD 委員会にて結果を集計した後、第 8 週目から第 9 週目にかけて教員は回収された学生からのフィードバックを元に授業の改善計画書の作成・回答・公表を行い、第 10 週目以降に改善計画を実施するものであった。調査方法、質問数・質問内容、回答形式は 2025 年度と同一であり、学内の基幹システム「T-NAVI」の回答機能「E2S」による匿名アンケートとして行われた。

1.2 授業評価アンケート質問項目（2025 年度-2026 年度共通）

授業評価アンケートの質問項目は、2025 年度と 2026 年度共通で 18 問から構成されている。質問は I.履修とシラバス（Q1～Q3）、II.授業の内容（Q4～Q9）、III.授業・課題提出（Q10～11）、IV.授業外の学修（Q12）、V.あなたの学び（Q13～16）、VI.授業の評価（Q17）という 6 つの観点から「授業・先生に対する評価」と「学生自身の評価」を尋ねる構成となっており、最後の Q18 が自由記述項目であり、学生は「1.記述することがない」「2.記述したいことがある」の 2 つの選択肢からいずれか 1 つを選択し、「2.記述したいことがある」を選択した場合は、入力画面にて内容を回答・提出する流れとなっている。この部分が今回の報告書の分析対象となっている。

1.3 2025 年度春学期データと 2026 年度春学期データの概要

2025 年度春学期と 2026 年度春学期のデータ概要を示す。2025 年度の回答学生数（延べ数）は 1,376 名、対象となった授業数は 192 であった。対象は全学部、学年は 1 年生から 4 年生である。一方、2026 年度の回答学生数（延べ数）は 1,330 名、対象の授業数は 182 であった。対象の学部と学年は 2025 年度と同一である。

1.4 2025 年度春学期自由記述集計結果

アンケートの自由記述（質問番号 18 番）において、「記述する」を選択した学生は全体の 4.0%であった。このうち、入力画面で何も入力せずに空欄などで回答した学生が選択者の 5.0%含まれていたため、自由記述欄の実回答者数は全体の 3.8%であった。記述した属性を見ると、学部別では商学部が最も回答が多く、次いで経営学部、最後に人間科学部の順に多い結果となった。学年別で見ると、低学年ほど自由記述を回答する割合が高く、学年が上がるにつれて記述率が低下する傾向が見られた。なお、人間科学部のみ 1 年生が最も多いものの、次いで 3 年生、2 年生、4 年生の順に多い結果となった。

1.5 2026 年度春学期自由記述集計結果

2026 年度春学期についても同様に、「記述する」を選択した学生は全体の 3.75%であったが、このうち選択者の 15.3%は空欄で記述内容がなく、実回答者数は全体の 3.2%であった。2025 年度と同様に、学部別では商学部が最も回答が多く、次いで経営学部、最後に人間科学部の順であった。そして、学年別では低学年ほど記述ありの割合が高く、高学年になるにつれて記述率が減少する傾向が確認されたが、経営学部の 3 年生、人間科学部の 4 年生による記述がやや増えた学年が確認された。

2 キーワード分析

2.1 キーワードと極性の設定

自由記述の分析にあたり、2025 年度の春学期・秋学期の分析で抽出・開発した 16 のキーワード（ラベル）を、今回も同じ基準で用いた。各キーワードには、記述内容に応じて極性（肯定的：ポジティブ、中立的：ニュートラル、否定的：ネガティブ）を紐づけている。なお、改善案（～して欲しい、資料をクラスルームにアップして欲しいなど）は、ネガティブに含めている点に留意が必要である。キーワードと極性の付与にあたっては、まず自由記述の内容を確認してキーワードを決定し、その後、内容に応じて極性を決定している。一件の自由記述に複数の事柄（例えば授業内容やスピードなど）が記載されている場合は、それぞれ別のキーワードを付与しているため、記述者の総数とキーワードの総数は一致しない点に留意が必要である（一方、極性はキーワードごとに 1 つずつ付与するため、極性の総数とキーワードの総数は一致する）。次節ではワードクラウド分析による自由記述全体の傾向を概観し、キーワードと極性の出現件数を 2025 年度と 2026 年度の年度間で比較し、学部別・学年別の傾向を確認する。続いて、出現頻度上位 10 点のキーワードの年度比較を示したうえで、教員の種別、建物・教室別の傾向を順に分析する。

2.2 ワードクラウド分析

2025 年度春学期のワードクラウド分析の結果は、授業評価アンケートという性質上、「授業」が中心語となっており、続いて「スライド」「パワーポイント」「課題」「欲しい」「分かりやすい」「資料」「配布」「先生」「講義」「レジュメ」といった語が目立った。2025 年度の結果を 2026 年度と比較すると「パワーポイント」「レジュメ」「教授」「質問」など資料や質疑応答に関する用語

がより前面に出ている点が特徴的である。2026 年度はオンデマンド授業の推奨期間が設けられたことから「オンデマンド授業」のキーワードが大きく表示されていた。

2.3 キーワード全件

2025 年度と 2026 年度の自由記述について、記述内容からラベル付けしたキーワードを比較した。その結果、キーワードの総件数は 2025 年度から 2026 年度にかけて▲18.7%減少した。個別に見ると、「授業内容」「先生」「スピード」などが件数上位になり、大半のキーワードで 2026 年度が 2025 年度の件数を下回る結果となった。これは 2026 年度の自由記述件数自体が前年度より減少していることに起因すると考えられる。一方で、「資料・配布・プリント」「その他」「説明」「時間」の 4 項目は前年度から件数が増加している項目となり、全体的な減少傾向のなかで例外的な動きを示していた。このうち「説明」「時間」については統計的検定（オッズ比、有意確率）の結果、年度間で統計的に有意な差が確認できた（後述 2.7 参照）。

2.4 極性

ラベル付けしたキーワードに紐づいている極性（ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ）を年度間で比較した。その結果、2026 年度のニュートラルとネガティブは 2025 年度と同程度（ニュートラル+15.8%、ネガティブ▲19.3%）の変動幅にとどまった。一方、ポジティブは 2025 年度から 2026 年度にかけて▲26.7%減少し、全体の変動幅を上回る落ち込みを見せた。この結果だけを見ると、ポジティブな内容を記述する学生が相対的に減っているようにも見えるが、極性の構成比についてカイ二乗検定を行ったところ年度間に統計的な有意差は認められなかった（ $\chi^2=1.57$, $p=.46$ ）。

2.5 極性の学部別・学年別比較

学部別と学年別のポジティブ件数を割合に直して推移を年度比較した。その結果、2025 年度春学期は低学年でポジティブ率が高いが（1 年次の商学部が 20.8%等）、学年が上がるにつれて低下する傾向が見られた（3 年次の商学部が 5%等）。一方、2026 年度春学期は 1 年次から 3 年次まで低下傾向は同様にあるものの、4 年次にかけて再びポジティブ率が上昇する動きが見られた（特に、商学部では 4 年次に 50.0%まで回復している）。ポジティブ率の上昇は学生の肯定的な評価の増加を意味するため、この高学年次での持ち直しは望ましい傾向として捉えることができる。一方、学部別と学年別のネガティブ率の推移比較では、2025 年度春学期は 1 年次から 3 年次まで上昇を続けたのち 4 年次にやや低下する傾向が見られた。カイ二乗検定の結果、学年間の差は統計的に有意となった（ $\chi^2=18.37$, $df=6$, $p=.0054$ ）。一方、2026 年度春学期は 4 年間を通じて学年が上がるごとに緩やかに上昇する傾向を示したが、学年間の差は統計的に有意にならなかった（ $\chi^2=10.07$, $df=6$, $p=.121$ ）。

2.6 キーワード TOP10

出現件数上位 10 点のキーワードについて件数の集計結果を年度比較したところ、「授業内容」「先生」「スピード」は 2025 年度から 2026 年度にかけて減少した。一方で「資料・配布・プリント」「説明」「その他」は増加していた。2026 年度に件数が減少した項目は、2026 年 3 月に実施した FD 研修との関連が推測されるが、この点については今後別途検証する必要がある。また、「課題・レポート」「スライド・PPT・文字」「音声」「学生・私語」の 4 項目は年度間で件数の変動がほとんど見られなかった。

2.7 ネガティブ・キーワード TOP10

ネガティブ極性のキーワードに絞った出現件数上位 10 点を年度比較した。その結果、「授業内容」「スピード」「先生」「音声」「質問」が減少した。一方「資料・配布・プリント」「スライド・PPT・文字」「説明」は増加しており、全体傾向（前述 2.6）と同様の方向性を示した結果となった。統計的検定の結果、「スピード」（2025 年度→2026 年度▲56.3%減少、オッズ比=1.94、 $p=.019$ ）は有意に減少し、一方「説明」（2025 年度→2026 年度+56.3%増加、オッズ比=0.47、 $p=.032$ ）は有意に増加したことを確認できた。また、TOP10 には含まれないが「時間」（2025 年度→2026 年度+200.0%、オッズ比=0.25、 $p=.038$ ）も有意な増加を確認できた。これら 3 項目のうち、件数の変化幅が最も大きかったのは「スピード」の▲56.3%減少であった。

2.8 ネガティブ・キーワードの出現率

キーワードの極性を分析対象とし、1 件のレコードに対して複数のキーワード・極性が付与されるケース（割合は 14.6%）による非独立性を考慮し、レコードをクラスタとする GEE（一般化推定方程式）による二項ロジスティックモデルを用いた。分析対象は 2026 年度春学期データにおける極性の合計件数 308 件（専任 62.3%、非常勤 37.7%）であり、従属変数を「ネガティブか否か（0/1）」、独立変数を担当教員の種別とした。分析の結果、教員の種別によって特定のキーワードが付与されるオッズが約 2 倍高く、統計的に有意であることが示された（ $B=0.69$, $SE=0.31$, $z=2.22$, $p=.026$ 、オッズ比=1.99、95%CI[1.08, 3.67]）。

2.9 建物別・教室別ネガティブ・キーワード出現比較

ネガティブ・キーワードの出現件数を建物別・教室別に集計した（なお、教室別とは 300 人以上が収容できる教室を大教室、100 人以上 299 人以下が収容できる教室を中教室、99 人以下を収容できる教室を小教室に分類している）。その結果、1 号館の大教室が全体の 34.7%を占めた。なかでも「資料・配布・プリント」は同教室内の 17.9%を占めて突出し、次いで、「スピード」「授業内容」「説明」「その他」の順となった。次いで、1 号館の中教室が 22.3%、1 号館の小教室が 19.0%、5 号館の小教室（コンピュータ教室含む）が 18.6%の順に多い結果となった。1 号館とその他建物（合算）の間でネガティブ・キーワードの出現パターンにも当初有意な差が確認された（ $\chi^2=21.60$, $df=6$, $p=.0014$ ）。しかし、教員の種別を統制変数に加えた GEE モデルで再検証したところ、オッズ比は統制後も有意なまま（ $OR=2.03$, $p=.031$ ）であった。一方、建物（1 号館か否か）の効果は統制すると消失した（ $OR=1.07$, $p=.856$ ）。

3 ネットスコア分析

ネットスコア分析とは、キーワード・極性の件数を用いて対象物を相対的に評価する手法である。本分析では、自由記述の内容ごとに付与されたキーワード（極性はポジティブとネガティブ）の件数を用いて「ポジティブ件数－ネガティブ件数＝ネットスコア」の得点を算出し、各授業を評価した。結果の数値がプラス方向で大きいほどポジティブな言及が相対的に多く、一方マイナス方向で大きい（絶対値が大きい）ほどネガティブな言及が多いことを示すものである。次節では、授業別のネットスコアの上位と下位について、2025 年度と 2026 年度の分布および年度比較を示す。

3.1 授業別ネットスコア（上位）

2025 年度春学期は、記述がなされた分析対象授業の 12.5%がネットスコア 1 点以上を獲得し、最高スコアは+4 点であった。2026 年度春学期は、記述がなされた分析対象授業の 13%が 1 点以上を獲得していた。なお、2025 年度にネットスコアを獲得していた授業の多くは、2026 年度にスコアに変化が

生じていた。

3.2 授業別ネットスコア（下位）

2025 年度にネットスコア下位であった授業は、2026 年度にスコアが改善していた。この結果は、授業評価アンケートのフィードバックや授業改善計画、FD 委員会等の取り組みが、個別授業の改善に一定の効果を上げている可能性を示唆するものである。

4 まとめ

本分析から得られた主な知見は、以下の 5 点である。

第一に、2025 年度春学期と 2026 年度春学期の授業評価アンケートにおける自由記述の記述件数を比較した。両アンケートにおいて「記述する」を選択した学生の割合は、2025 年度が全体の 4%、2026 年度が全体の 3.7%であった。このうち、記述内容が空欄等であった学生の割合（2025 年度は選択者の 5.0%、2026 年度は 15.3%）を除いた実回答者数を集計した。なお、学生単位ではなく授業単位でみると、対象授業のうち実際に自由記述コメントが得られた授業の割合（記述率）は、2026 年度は 50.5%となり、2025 年度の 58.3%と比較して減少した。しかし、抽出したキーワード件数は ▲18.7%減少したものの、極性（ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ）の構成比を年度間で比較したところ、統計的な有意差は認められなかった（ $\chi^2=1.57, p=.46$ ）。したがって、記述件数自体は減少したものの、学生の評価の構成（ポジティブやネガティブの傾向性）については、変化があったとまでは言えない結果となった（なお、ネガティブには悪評以外に改善意見や提案も含めている点は留意が必要である）。

第二に、学部別と学年別のネガティブ率は、2025 年度は高学年で有意に高かったが（ $\chi^2=18.37, p=.005$ ）、2026 年度は有意水準に届かなかった（ $\chi^2=10.07, p=.121$ ）。なお、この学年別ポジティブ率の推移についても統計的検定を行ったところ、有意な関連は認められなかった（ $\chi^2=3.29, df=3, p=.35$ ）。特に 4 年次は件数の母数が少ないため、数値の変動には注意が必要である。

第三に、GEE（一般化推定方程式）による分析の結果、教員の種別では特定のキーワードが付与されるオッズが有意に約 2 倍高いことが確認できた（オッズ比=1.99, 95%CI[1.08, 3.67], $p=.026$ ）。

第四に、教室の規模別（大教室・中教室・小教室）にネガティブ・キーワードの出現件数を集計したところ、「資料・配布・プリント」（大教室から小教室にかけて▲60.0%）、「学生・私語」（同▲60.0%）、「出席」（同▲83.3%）、「その他」（同▲66.7%）の 4 項目については、教室規模が大きいほど出現件数が増加し、小さくなるにつれて減少するという明確な傾向性が確認できた。次に、建物別にネガティブ・キーワードの出現結果を比較したところ、1 号館とその他建物の間で当初統計的に有意な差が見られた（ $\chi^2=21.60, p=.0014$ ）。しかし、教員の種別を統制変数に加えた GEE モデルで再検証したところ、オッズは統制後も有意なままであったが（OR=2.03, $p=.031$ ）、建物（1 号館か否か）の効果は統制すると消失した（OR=1.07, $p=.856$ ）。

第五に、ネットスコア（ポジティブ件数からネガティブ件数を減じる）を授業別に算出し、スコアの上位と下位をそれぞれの年度で比較した。その結果、2025 年度にネットスコア上位であった授業は、2026 年度にスコアに変化が生じていた。一方、2025 年度に下位であった授業は、2026 年度にスコアが改善しており、授業評価アンケートのフィードバックや授業改善計画、FD 委員会等の取り組みが、個別授業の改善に一定の効果を上げている可能性が示唆された。

おわりに

本分析の結果、①自由記述の記述件数は減少したものの、学生評価の構成そのものに大きな変化は見られなかった。②教員の種別分析では、特定の極性結果が生じやすい傾向や、教室規模の見かけ上の影響が教員種別の配置構造に起因することが明らかになった。また、ネットスコアを 2025 年度と 2026 年度と比較し、スコアに変化が見られたことは、授業改善の取り組みが一定の効果を上げていることを示唆している。今後このような知見を踏まえた継続的なモニタリングと支援体制の充実が求められる。